

ドバイ駐在回想記

松林 紀行

明星大学経済学部特任教授

1. はじめにマクロ的回顧より

ブルージュドバイ(世界最高のビル、地上160階828m)、ブルージュアルアラブ(世界最高の海上ホテル、321m)、アトランチスザパーム(世界有数の人工島リゾート)、パームアイランド(世界最大の人工島群)、ドバイモール(世界最大のショッピングセンター)、ドバイメトロ(世界最長の無人鉄道)、サファリツアー、ドバイクリークのアブラ(渡し船)、ドバイワールドカップ(世界最高賞金額の競馬場)、欧州男子ゴルフツアーに組み込まれるドバイゴルフ場など、何においても中東一、世界一を目指す金融と観光の国ドバイ。前方は紺碧の空と真っ青なペルシア湾、後方は無限に広がる赤茶けた砂漠と飄々と闊歩するラクダたち。夜には満天の星がすぐ頭上にきらめく。本当にドバイの景色にはいつも圧倒される。

そんなドバイも昔は誰も、少なくとも日本人は、知らない中東の小さな密貿易の要衝地だった。今からおよそ35年前の1978年末、当時三井物産の鉄鋼部門に所属し、当時30歳であった筆者は、アラブ首長国の首都アブダビ国の入札準備に日夜取り組んでいた。

当時の日本は、高度経済成長の終焉と1973年の変動相場制移行によるドルの円高による金融引き締めなどにじわじわと苦しめられていた(260円台から実に180円台まで切り上げ)。また海外でも同年末のイラン革命とそれに続く第二次石油危機、イラン・イラク戦争危機など産油国を起因として全世界に不安と脅威が浸透しつつあった。

入札の中身は、アブダビ沖合に位置するアッパーザクム海底油田開発に従事する作業員たち用の海上居住区建設であった。フレアガスが燃えしきる海底油田上の生産井、プラットフォームに隣接する人工島を建設するプロジェクトであった。それは、筆者が少年時代に過ごした長崎県沖合の高島(日本で最初に石炭が発見された島)のさらに沖にある同町端島(通称軍艦島。世界遺産として申請準備中)を彷彿とさせる巨大な軍艦型プラットフォームだった。

このプロジェクトは、当時の為替換算で35億円程度と海外入札案件では少額であった。しかし円高のあおりをもちに受けたことにより、著者が所属する応札グループ三井連合は残念ながら落札の結果2位と僅差で逸注した。1年半近く準備に取り組み、アブダビの信用状態や食糧、飲料、石、セメントなど現地調達可能物資、労働力の海外調達、沖合工事の運営管理、入送金の難易度、気候条件などあらゆる環境条件や現地事情を詳しく調べ、偶

発的危険を最小化できた自信満々の応札であっただけに、直前の未体験の円高リスクに翻弄され、本当に悔しい思いをしたことを覚えている。それが、筆者とアラブ首長国との初めての出会いだった。

激しいエネルギー競争の結果、筆者が育った石炭や炭鉱の町を一瞬にして廃墟・灰塵化させた脅威の石油の国へと、皮肉にも筆者は翌年赴任することになる。人生の機微を感じた瞬間でもあった。まだ二人の子供が2歳と1歳のよちよちのころだったが、商社の海外赴任は家族帯同が原則。特に日本人の少ない国での勤務では、家族一丸となって自宅出張者や要人たちの食事や饗応を施すことが唯一絶対の武器となっていた。

アラブ首長国は、1971年にイギリスの保護国から独立したばかりの新興国だった。石油を産出する首都であるアブダビをはじめ、もともと海賊や密貿易で栄えていたドバイなど7つの首長国が、強い英雄的リーダーであるアブダビのザイド王のもとに結束してひとつの連合国家となったものの、社会インフラや法律、貿易ルールなどはまだまだ未整備で曖昧な部分が多かった。したがって現地の状況に特になじみの薄い日本人たちは、当時自ら進んで色々な体験をすることで異文化の雑情報を寄せ集め、現地生活の知恵を一から取得していた。皆で検討し、協力し合うことで初めて現地の生活や仕事が成り立っていた。そのため当時のおそらく150人程の日本人小社会は、自然と互惠互助の精神のもと、辛くともとても息の合った楽しい原始的大家族擬制軍団を構成していた。ある意味でブラジルや米国へ移民した昔の日本人の原型に近いものがそこにあった。それこそが英語圏で自由奔放に生きうる欧州人やインド人、華僑社会とは全くことなるハンディキャップであり、また逆に日本人特有の強い絆を生みだす力ともなっていた。

国を挙げてオフィスビル、マンション、ホテルの建設ラッシュ、石油・ガスパイプライン、発電施設、造水施設、LNG開発など数多くの社会インフラが次々に建設される様は、まさに日本の戦後直後の高度経済成長期を思わせた。その中で従来からの密貿易、あるいは自由貿易魂の教訓なのか、ドバイのラシッド国王の戦略・機略はひときわ異彩を放ち、観光、労働者、税金、起業、アルコール、宗教などあらゆる人と物の規制を外国人に対して取っ払い、イスラムの世界でいち早く自由闊達にして門戸開放したわけで、その画期的手腕は今さらながら驚嘆に値する出来事である。ドバイは地政学的にもまさに中東であり、西の欧州やアフリカと東のアジア諸国とは海上距離にしてほぼ等しく、物流と金融の絶対的均衡点であった。1973年にはすでにシャリア法典を巧みに解釈し、実質利息ありのドバイイスラム銀行が設立されるなど、当時から世界の金がイスラムの銀行や欧米系銀行経由投融資資金として集まる仕組みをなしていた。ラシッド王は現代のビジネス社会においてもきわめて有能な起業家として高い評価を得るだろう。

ラシッド王を含むマクツーム一家系の血を受け継ぐ多数の土着ドバイアンやベドウィンなどに限らず一般にアラブ民族は、時に排他的、野心的、挑戦的であった。例えば、ある

地元の映画館で「砂漠のライオン」という、20世紀初めイタリアの植民地だったリビア独立のために命をささげた英雄オマール・ムクタをテーマとする映画が上映されていた時のことだ。ムクタが映画に登場するや老若男女問わず、全員が足で床をドンドン打ち鳴らし、人差し指を鼻の下に置いて一斉に「ラルラルララー」と不気味な嬌声が響き渡った。アラブ人は国や国境などお構いなしにやはり民族として団結するのだ、とアラブ人の矜持を垣間見た瞬間であった。今の極東のとある国と重なるところがある。

彼らはその昔、休戦海岸を含めたペルシア湾やホルムズ海峡で勇猛な海賊として恐れられ(今も北イエメンでは海賊が横行している) 19世紀初めには英国艦隊ミネルバ号をも撃破し、行く行くは英国に休戦協定を結ばせたほどの闘争民族。その血は熱い闘志にあふれ、決して負けを認めず、過ちもみとめない気質は先祖伝来連綿と受け継がれているのだと思う。

当時のドバイはまさに国づくりの最中、すなわち黎明期で、外国人居住者を含め国中が若く昼夜活況を呈していた。そこで働く日本人も皆若く(若くないと体力的に持たないのも事実であるが)大きな緊張と使命感に燃えて奮闘していた。今日のドバイと日本のかけ橋を築いた大変意義のある充実した時だったのだと振り返ってみて思う。確か最も年齢が高い者でも某商社代表の40代半ばだったと記憶している。

摂氏50度、湿度80%を超える沸騰都市のドバイは一面が砂と土におおわれた土漠国家で、勿論イスラム圏である。人口は30万人に満たない村ではあったが、ラシッド王の導きどおり、富をもとめて世界から人々が集まってきていた。英領であったため、英国人はもちろん、地下水や鉱水技術の高いフランス人、貿易商のオランダ人、ドイツ人、インフラ建設需要を満たす東アジアからの出稼ぎ労働者であるインド人、パキスタン人、鉄の溶接に優れたフィリピン人、スークなど市場で働くベンガル人、アパート管理やガードマンなどのアフガニスタン人そして、鉄鋼や繊維、タイヤ、家電製品など基本物資や生活製品を取り扱う日本人、韓国人等々、まさに人種のるつぼであった。30年後の現在のドバイの繁栄の原点がその人たちであり、そこに我々もいたことになる。とても名誉なことだ。

ドバイはまた昔から交通の要衝でもあった。前述したとおり、人間と物資の移動はきわめて自由活発であったため、もともとあらゆるものが価格競争の原理のみに晒されていた。筆者の取り扱った鉄鋼も例外ではなく、トルコを除く当時の中近東では、鉄鋼は地元では生産されず、常に欧州勢の商社と極東アジアの商社が日々戦っていた。近代の株式会社形態と同じく、オーナーのアラブ人だが経営者はインド人やパキスタン人という具合に、所有と経営が見事に分離され効率的運営がなされていた。ドバイをはじめ先進国では1人の人間が年間に鉄を消費する重量はおよそ1トンと計算され、ドバイはおよそ30万トン、アラブ首長国全体でも約100万トン強の小さい市場と推定された。この数字だけでは当時の日本の鉄消費量(1億トン)の1%とさほど魅力はないが、現在のミャンマーと同じく、

ドバイは今後世界をリードするあらゆる可能性を秘めた自由な未開発市場であり、イランやイラクに対する仲介貿易基地としての潜在魅力を十二分に備えていた。「非常に豊かな国へ皆が行く前にまず自分がひと儲けしよう」と経済学的「合成の誤謬」現象が既に発生していた。毎年、外国人人口は増え、実質 GDP 成長率は二桁の増加を歩み始めていた。この傾向は今も4年前のドバイ金融ショックを除き連綿と続いている。

日本の商社は、大手総合、専門鉄鋼商社、電気製品専門商社など10社近くが同じ頃に進出し、中継地としてあらゆる財を輸入、再輸出していた。鉄鋼に関しては、7社ほどが駐在員を介し、引き合いの入手と指値獲得に熾烈な日々を送っていた。鉄鋼問屋、ストックリスト（在庫業者、仲介業者）、組み立て加工業者、石油掘削業者、エンジニアリング会社などが顧客であった。さすがにユダヤ人はいないがインド人やパキスタン人の実践で身につけたたかな商談は一筋縄ではいかなかった。皆、いち早く日本の本社へ持ち込み、その指値を飲むべく、日本でのメーカーと本社の厳しい交渉結果を見守った。彼らの一見気まぐれにも見える優柔不断な交渉術に何度も苦渋を飲まされ翻弄されたものだ。昼の商戦の後、毎夜、会社の垣根をこえて複数の日本人家族が集いその労をいたわり、健闘を称えあった。まさに企業戦士とその家族たちだった。

2. かたい話はこれ位にして、ミクロの具体的回顧に移る。

「アッラーホ アクバル、アッラーホ アクバル（神は偉大なり）」アザーンという毎日5回の礼拝（サラート）への呼びかけを毎日大音響で聞いた。子供も野犬も。

ドバイの女性達は外ではブルカと呼ばれる烏天狗を着ていたが、外国人は全く自由だった。もっとも妻たちは炎天下のベランダに洗濯物を干す時は頬っ被りとサングラスで直射日光と湿気を避けていた。まるで月光仮面の出で立ちだった。高価な酒も免税並みに安く自由に自宅で飲めた。実際、ドバイ人は税も教育も無料であった。すべてが自由で実力社会であり、敗者のみが消え去っていく社会だった。

筆者の会社には日本人3名、インド人男性スタッフ3名、女性秘書1名、運転手2名そしてハウスポーイ1名（ハッサン君）がいた。日本人以外は全員インド最南端のケララ州出身者だった。彼らの州は識字率がほぼ100%と高い。昔は数学者や天文学者を多く輩出した所でもあり、文化教養度はとても優れている。彼らもやはり日本人同様に、同郷あるいは同州出身でかたまって生きていた。スタッフのトーマス君は同い年であり、とても気が合った。彼の英語の発音はともかく、ヒアリング力は抜群で難解な英国人の訛りすら見事に理解していた。彼とは常に一緒に行動し客先と交渉を重ねた。本当によく助けてもらった。

彼らはイスラム教、仏教、ヒンズー教そしてキリスト教徒と宗教は全くばらばらであった。会社でも街でも宗教への干渉はさほど厳しくなかった。勿論ラマダン（断食月）中は

イスラム国家ゆえ、職務中や外でもすべて日の入りまで禁酒・禁煙だった。そういえば、ある時、家族と運転中にいつもいばっているアラブ人の警察官に突然呼びとめられ、あやうく免許証不携帯で連行されるどころ、2歳の娘が咄嗟に「アッラーホ アクバル！」と口ずさみ、警察官も苦笑して不承不承見逃がしてくれた。また、トーマス君が何とか一日貸してくれたインド人小学校で日本人会始まって以来待望の運動会を主催した際、ダンスで「マイムマイム」を踊っていたら、どこからか宗教警察官達がやって来て「マイムマイムはイスラエル民謡だ」と即止められた。やはりイスラムの国だ。

3. トーマス君達との日常

「彼は絶対4時20分だよ」。トーマス君が、客先の役員の性格を彼らの隠語で教えてくれた。「4時20分」とは、口元がちょうど時計の長針と短針が重なり合って顔の一部がひんまがった表情を表すということで、腹に一物も二物もある警戒すべき男との意味らしい。蓋しうまい表現だ。海外で初めて知った隠語だった。ちなみに、この隠語はインドのケララ州独特のものらしく、その後南アフリカや欧州で何度も試してみたが誰も知らなかった。

赴任してしばらくしたある日、対岸のイラン向けに電化製品を積んだいくつものダウ船が滞船している波止場にトーマス君たちと歩いていた時、突然彼が筆者の手を握ってにっこりと笑った。彼らの生活習慣では信頼を得た人間のみに対して示す行為である。嬉しかったけれどやはり恥ずかしかった。けれども真の仲間に加わった瞬間だった。よくみると確かに街中やスークでインド系の男同士が手をつないで歩いている。とても光栄だった。

ある暑い日の朝、会社のビルを出て駐車中の車に向かったところで、何やら怒声が聞こえた。隣のトーマス君たちはその警察官をみるなり一斉に小走りに逃げ去っていく。「どうしたの？」と聞く筆者に「ノリ、心配しないで。必ず助けに戻って来るよ！」というトーマス君。振り返ると筆者は屈強な警察官たちに取り囲まれて、何が何だか分からぬうちにそのまま警察署に連行されてしまった。

彼らの片言英語によると、何でも「お前は1週間前に某ショッピングセンターの駐車場で、我がアラブ人の車をぶつけた。本人がぶつけた車のナンバーを覚えていたのでお前を逮捕した。目撃者のアラブ人は今夜か明日にこちらに来るから、それまでお前を拘束する。うんぬん」というのではないか。「冗談じゃない。確かに車の先端がこわれているが、これは別の駐車場のポールにたまたまぶつかったものだよ」とわめいてみたが聞く耳持たず。しばらくして、真っ黒な護送車で他の囚人たちと一緒に大きな留置所へ移された。脱水状態でしょんぼり座って質問攻めにあった。先方は筆者の流暢な九州訛りの英語をよく理解せず、無視。ほとんど途方に暮れた一日だった。この後どうなるのだろう。日も沈んでアザーンが鳴り響き、辺りに野犬がうろつきだしたころ、ようやくトーマス君たちが頼りなさそうな当社のオマーン人のスポンサーを連れてきた。「ちゃんと罪を認め、お金を払えば簡

単に自由になれるよ」との説明に従い、納得いかないものの不承不承やっとなんか自由になった。

そういえば、別途アラブの女性が運転した高級車が彼女の不注意で筆者の車にぶつかって来た時も、やっぱり筆者が悪いからと現場で拘束され、後日裁判で「I was guilty」と罪を認め罰金を払ってやっとなんか自由になった。何というか「ドバイの自由も金次第」の感じだった。

夜は夜で、友人宅でマージャンを終えて家に帰る時は、真っ暗な中を駐車場まで必ず一目散に走って車に乗ったものだ。野犬や狂犬たちがうろろうろして、その目が異常に光っていた。

4. ハッサンのお茶

外は真夏の50度とはいえ、どこの会社も屋内はエアコンがきつく長くいることがしんどかった。ハウスポーイのハッサンは確か15歳くらいだったが、女性でいえばまさに明眸皓齒、紅顔の美少年でまるでマイケルジャクソンみたいだった。とても澄んだ瞳が眩しかった。彼に限らず夢を求めて当地に出稼ぎにきた人々は皆輝いていた。インドのケララ州からの出稼ぎ者にとってその当時でも10倍近い給料であり、5年も働くと一財産が出来る算段だった。酒酔いなどつまらない事件で騒ぎを起こすと即強制帰還されるので、町はきわめて騒がしいが、なるほど治安は良かった。彼も地元に戻った後はそれこそハウスポーイを雇い、大きな邸宅に家族や親戚と一緒に住んでいるようだ。そのハッサン、一生懸命仕事してくれるのだけれど、自分のルーチンワークは、まずトイレを掃除してその後に必ずコーヒーか紅茶を淹れてくれる。我々は知っていた。彼の爪に付いた真っ黒な汚れがコーヒーやお茶を淹れた後にはきれいになくなって清潔そのものになることを。

本店から人事担当役員や部長が暑い時期を外して冬の比較的肌寒いころ、熱帯地域の視察と社員家族慰安と称して定期的に来訪する。「いやあ、君たち現地での活躍ほんとに御苦労様。暑い最中、わが社のため、日本のため、日々孤軍奮闘して頂き本当にありがとう。ところでね、内緒だけれど我が人事部が極秘に調べたところでは、当社の社員の生存年齢はなんと君、実に60歳以下なんだよ。ライバルの某M商事も同じく60歳を切っているんだ。交通事故やストレスなど色々あるからねえ。お互いに情報を確認しあっているから本当だよ。その原因の一つが熱帯、亜熱帯で働く諸君たちや奥様達の頑張り過ぎやストレスなの。それが、あと後に我々社員の平均寿命を下けているそうだよ。くれぐれも皆さん健康には十分注意してくれよ。何でも相談にのるから遠慮しないで苦情を言ってください。そのための人事部なんだからね。そんなに無理して働かなくて結構だよ。うん。それが結局自分のため、家族のため、そして会社のためだからね。えーとそれからね。明後日帰国するけど長時間の航空や年の所為かな。いや大変な暑さと湿度のせいかな、すぐ体がくたびれちゃって、君、日本食しか体が受け付けられないんだよ。なんでもよいが、是非、お茶漬け、

おにぎり、漬物などだけ用意していただければありがたいね。ほんとに。」

日本食はとても貴重で家族はそれを食べられる日を指折り数えて待っているというのに、である。

「それから、明後日の出発便は夜中の2時ごろだよ。ホテルはチェックアウトしてしまっているし、誠にすまないが、それまで君の家で休ませてくれる？胃腸薬もある？深夜になったら悪いけど空港まで送ってくれたまえ。あつ、これはつまらないものだけど鮭の瓶漬けをお土産にもってきたよ。社員一同で食べてください。で、ついでながら筆者もね、さっき言ったとおり、体調が思わしくなく、茶漬け、おにぎり、味噌汁しか受け付けないので、少し、分けていただければ、というかご家族と一緒に皆で食べようね。お願い」

大体こういう方々は一番しのぎやすい時期を選んで来られるが、実は現地もこの時期が一番書き入れ時なので、仕事の合間での役員の世話に追われる誠にしんどい日となるのである。

話をもとに戻そう。彼ら失礼ながら招かれざる客が来社すると、ハッサンとのアイコンタクトで、まずコーヒーではなく、**紅茶**を差し出すのである。ハッサンの先ほどまでの真っ黒い5つの爪先はティーバッグを何度も上げ下げするうちに見事に真っ白、透き通ったような爪になって運んでくる。その分、紅茶がちょっと黒い。

筆者たちはコーヒーでお相手する。ものの5分も立たないうちに にこやかだった彼らの表情は一変。顔は苦痛と忍耐でゆがみ、びっしょりと汗だくに。ついにはお腹から異様な音を発してトイレに駆け込むことになる。

筆者もこの苦しみと洗礼は体験済みだ。このハッサンの黒い紅茶は誠に強力で、インド滞在中に一度もお腹を壊さなつたと豪語する猛者達も一発でやられたほどの優れ物だった。でも心配ご無用、不思議にもすぐに治るのである。まさにドバイの洗礼、伝家の宝刀だった。当時の人事役員殿、本当にごめんなさい。

当時のハッサンの写真がないのがとても残念である。いずれにしても、あれから35年、ドバイは栄光と挫折を経験してまた新たな夢と希望を我々に与え続けている。当時の若き日本人企業戦士たち、ドバイの仲間たちに祝福あれ！インシャラー！（了）